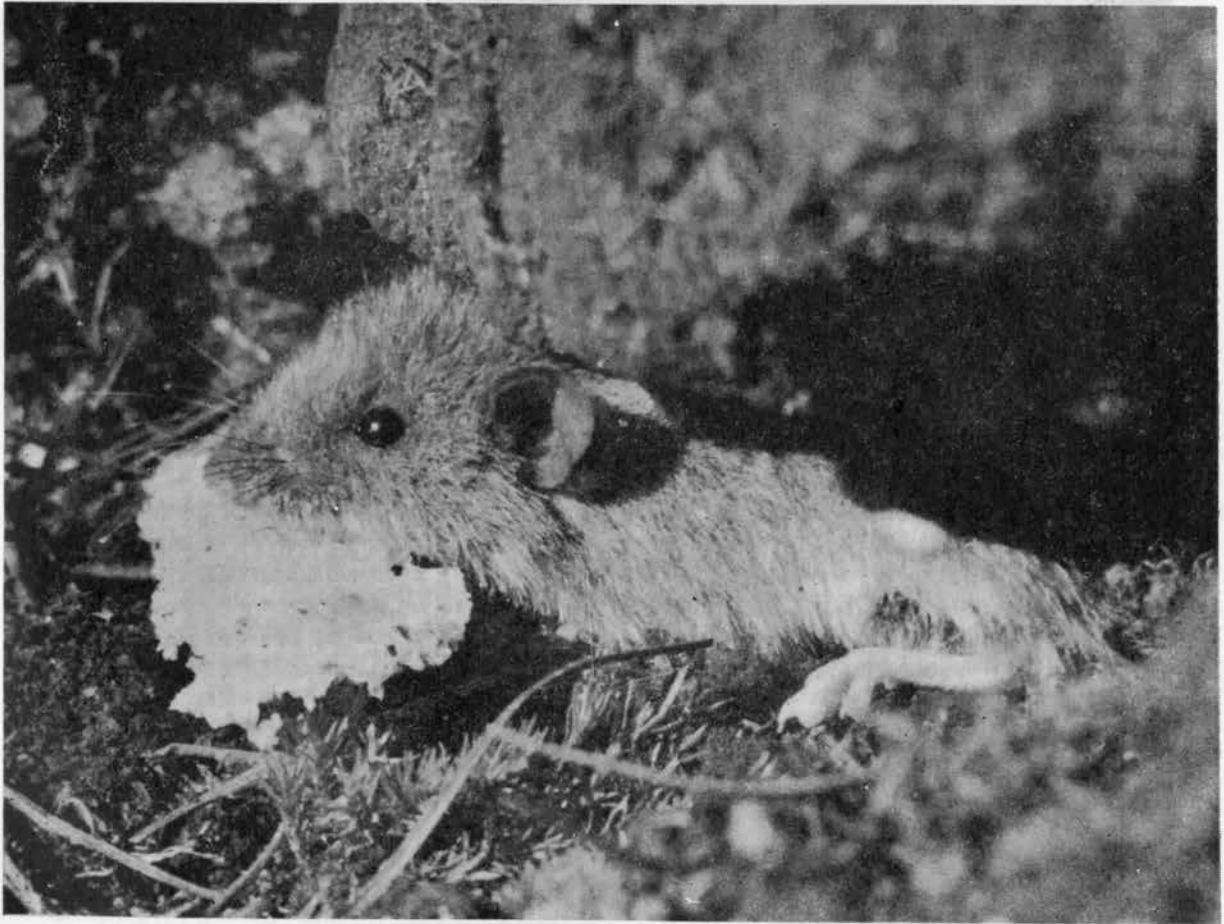


山と博物館

第 5 卷

第 1 号

1960年1月25日

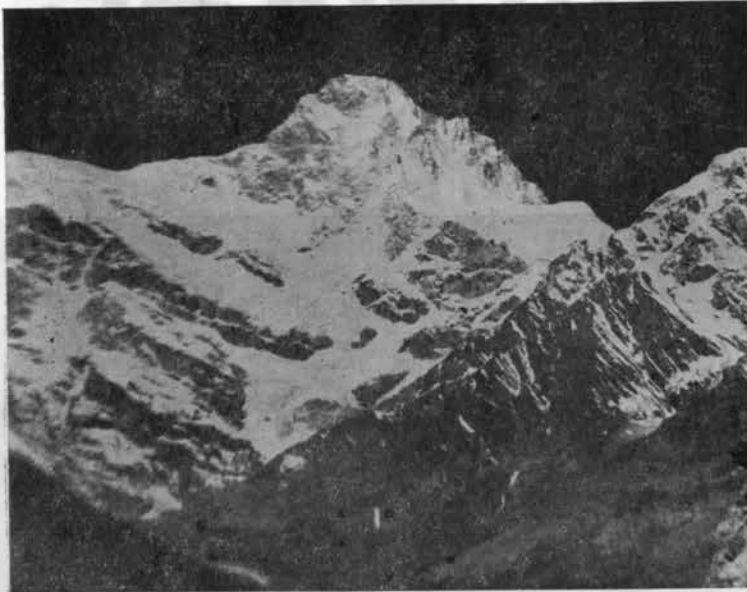


クマネズミ 今年はネズミ年、暖かい陽がさんさんとふりそく岩の下から顔をのぞかせ餌をくわえた幼体をフィルムに収めた。(大町市平区白沢地籍、滝の沢小屋)

大町山岳博物館

日本登山界と山岳雑誌の占める位置

川 崎 隆 章



慶大の指向するヒマルチュリ

(依田孝喜撮影)

日本の登山界は1956年、第三次マナスル登山隊の登頂成功により、ようやく世界の登山界の仲間入りができたといえるようである。第一次ではアタック隊員の一人石坂昭二郎氏は、『酸素吸入器も携行せずして登った不遜』と自戒している。かくして1953年6月1日第二隊は7750メートルより退き、ベースキャンプの印度放送で国家的事業として、国をあげて長年しつように戦いつづけた英国隊のエベレスト征頂を聞いて衝撃をうけ、カトマンズに帰つて独塊隊の難峰ナンガ・パルバット征頂を知り打ちのめされた。しかしながら日本隊は立ちあがり翌年堀田隊がくり出されたが、サマ部落の狂信徒に行手をさえぎられ、ガネッシュ・ヒマルに転進したことは衆知の通り。このようにして第三次は横有恒氏を隊長に推したことは、日本山岳界としても最後の切札を切つたといふべきで、今度の登頂が失敗すると国家的にも信頼感を失い、国民の意気も沮喪し、他国に登られてしまう公算が大であつただけに国民の期待も大きかつたが、見事第一隊、第二隊と登頂をかちえたことは万雷の拍手をおくるにふさわしく、このため国内の登山熱は大いに上つたといふべきである。横有恒氏は日本に近代登山術をもたらした功労者であり、1922年のアイガー・東山稜初登攀に成功して青年ヘル・マキの勇名を欧州登山界にとどろかせ、帰朝後、1925年7月マウント・アルパータに慶応登山会のメンバーで初登頂した。この業績は鹿島槍北壁の冬山合宿の立大山岳部が天狗尾根に展開したポーラーメソッドを基礎として1936年7月、堀田弥一郎氏を隊長と

してヒマラヤの一角ナンダゴットに初の日章旗をひるがえした征頂につながり、戦中のブランクを脱し、京大のアンナプルナ（隊長今西寿雄、未登）京大探検部のカラコルム、ヒンズークシ、スワートヒマラヤの学術探検、さらに早大赤道アフリカ横断隊は女子二名を加えるキリマンジャロ登山、同じく早大のアコンカグア南北両峰登頂、又日本南極越冬隊はハラルド陸地奥の氷原にそびえるポツンマーテン登頂等の業績となつて現われた。

一方先進国である欧米の各山岳界を包含して8000メートル級のジャイアンツはエベレスト征頂を契機に次々登られ、今や6000メートル級の難峰のライト・エクスベディンションに移りつつあるが、わが日本でも海外遠征の意気とみに上がり、神戸大学

は世界に残された数少ない未知の秘境、南米チリのパタゴニアに遠征しチリで合同で針峰アレナスに初登頂につづき、日本山岳会のヒマルチュリは非常の氷壁にはばまれて敗退したが、京大のチョゴリザ、飯田山岳会のサルパチヨメ征頂とヒマラヤの処女峰に足跡を印して、ネパール登山史において、ナンダ・ゴット、チュリ西峰（今西隊）、マナスルにつづいた。福岡大学の創立25周年を記念するガウリ・サンカールは連絡不充分のため一行32名の全員遭難説が伝えられたが、無事同峰の登路を偵察し1961年にはギャチエンカン攻撃の許可をネパール政府から与えられて帰国した。竹田吉文氏を隊長とするペルー・アンデス探検隊はアウサンガテ南峰とその東の氷峰に初登頂してアロス峰と命名。米ソの雪男探検隊の第三陣として、日本からも『雪男研究グループ』の全面的援助で雪男学術探検隊がくり出されるなどの快挙もあつた。（隊長東大医学部教授小川鼎三氏——目下行動中）

1960年はいよいよ多彩で明大の創立80周年記念のアラスカ地域における学術調査ならびにマッキンレー山群登山計画、慶大の創立100年祭記念のアンナプルナ第二峰は日本山岳会のヒマルチュリに代肩し登路は別ルートで登はんする。（尚明大のマッキンレーには、早大、北大、学習院大も指向しているが一つの山に国内の登山グループの連絡不十分で、同じ年につめかけるのは、外国人から見てどうであろうか、批判され、修正され、考えて貰わねばならない——事であろう——今からでも遅くはない。登山、探検の名門京大は母校の創立30周年を迎

え、カラコルム・シアチエン氷河流域の最高処女峰サルトロ・カンリと同地域の処女峰テラム・カンリ（隊長四手井綱彦教授）、また世界文明起源の地といわれるイスラム圏の古代文明を探る「イラン、アフガニスタン、パキスタン学術調査隊」をくり出すなど矢張り早々の新企画の実施は心強い。北大理学部と同低温科学研究所は地球物理学教室の東見助教を中心にアラスカの氷河へ学術探検隊を送る。

一方全岳連の海外登山審議会は、東海地区岳連ヒマラヤ実行委員会のジュガール・ヒマラヤからランタン・ヒマールへ踏破する計画を認め割当外貸5000ドルをこれにあてることに決めた。（東京都岳連のヒムルン・ヒマール登山計画は認められなかった）同連盟の海外遠征は福岡大探検隊につぐもので隊員は名古屋大OBを主体としている。コースは昨年深田久弥氏らが踏査したものほぼ同じでジュガール・ヒマラヤの主峰、ビッグホワイト・ピークである。また早大オール女性登山隊（女子部員3名、アジア学会1名、青稲会2名）はニュージーランドのマウント・クラックに登る。同峰は、1913年ウイクレニーにより冬期初登されたが、今次ヒマラヤの悲劇といわれるコーガン夫人の国際婦人登山隊（チャー・オーで行方不明）が世界の登山界から注目されたように、高度こそ3768メートルだが、氷河のある山を女性のグループだけで登山を企てる意欲的な創意は一つのエポックである。一方国内の主要行事は国体登山や高体連全国大会、さらに県体登山などあり、山を怨う若人の意気はさかんであり、筆者の知る限りでも、海外に出ようと計画しているグループが40位あると思われる。最近は大々でも社会人山岳団体でもその行動に「訓練」の文字を使っているのは、将来海外に出るためのトレーニングとしてこれを用いているものだと解されるが、青年の血気が目的とへだたりがあり、ヒマラヤの山は予想以上巨きくきびしいのだから、身の程知らずと批判されないよう已を知り、目的物の何かを知つての計画でないところに人の死がまつことになる。それでなくても、最近続発する遭難事故は山への無知から発する「愚行」と評されている。ことに雪崩事故は自から死地に入っているもので、「雪崩道である急な沢を新雪直後登るのは鉄道線路を目をつぶつて歩くようなものである」、「それまで何回かの登高で雪崩の出なかつたのが幸運である」などの批判が出、遭難を実際に味わなければ山の恐ろしさがわからないのは残念ではないか。このため今年の冬山の各大学は慎重な気がまえが見え、法大が40日間にわたりヒマラヤへの第一歩として計画した利尻岳が目立っているだけだが、少なくとも大学にあつては登山は教育として実施すべきだという声もある。これは大学山岳部こそは登山の第一線であるとの自負に警告を与えるものであろう。

ここに山の事故を誇大にとり上げるジャ

ーナリズムがある。ことに最近の新聞紙が三面の大半を埋めて商業的にとり上げていのは、大新聞であるほど、その反響が著しいから自己反省を要し、登山の正しい進退を歪めないよう編集局長は考えねばなるまい。日本では1921年北大で発行した「山とスキー」（部報）が1930年まで続いたが部数も少なく頁数も薄く一般的でなかつた。山岳専門雑誌と銘打つて日本で初めて産声を上げたのは「山と渓谷」の1930年の5月で1960年30周年を迎える。このほかに明文堂の「山小屋」（現、山と高原）が1931年発行され、このほかケルン、登山（旧、関西山小屋）が出され、炉辺雑誌としては復刊になつた梓書房の「山」と同系の創文社の「アルプ」があり、名古屋から「岳人」が出ている。私達の「山と渓谷」の場合をいうと、社会人になつて、なお山をやめずつづけているうち誰かがどこかから山岳雑誌を発行してくれることを切実に祈る気持で待望した。30年前でも若い人たちの山行はさかんで年々登山界は賑かになつていた。しかし誰も私たちの希望をかなえようとしなかつた。これは経営的に積極的になれないためで、そうでなければ、当然大資本によつて競争的に発行されていたであろう。私たちはこのような打算は計算にない。唯毎月危険だから隔月刊という自重策をとつた（戦後は月刊）、発行してもそれで生活できるか否かの目安は全然なかつた。いつまでたつても誰も出してくれない山岳雑誌をとうとう私達の手で出すめぐり合わせとなつたのであり、それから明けてもくても山以外には何物もない生活がはじまり、30年間経過した。この間年100日の山行をつづけ、東京にいては原稿依頼、校正、印刷所出張、広告とりなどで始終した。広告収入が稀薄だとたちまち、発行がとまつてしまうので熱心にまわつた。しかしながら、最初の目安と違つて登山者の増加にもかかわらず売行は他の商業誌と比べると問題でなく、これでは大資本が手を出さないのは当然である。しかし珍しいと見えて、創刊号(50銭)3000部はたちまち売り切れ、その後創刊号のみは入手困難で古本価で2円という当時の高値がつづいた。けれどもこ



社会人団体により登られた横尾谷屏風岩の人工登攀

(東京雲後会南博氏)

のようにして飽かず刊行つづけているうちに世間で「山と渓谷」を「公器」と誰いとうなくいい、私たちが公器として出すようになった。一方に片寄らず思うことはどしどし表明した。30年は現在人間の半生に近い。今や世は「戦後」でなくなり、私たちの年令で山へ行く人は全く少く、自分の子供のような青年が山へ行く大部分の数となつたが、私たちの若々しい情熱、山へのひたむきな愛は学生時代と全然変つていない。それでこそ若い人に迎合される雑誌ができるのかもしれないと自負？しているのだが。もつとも現在は大学を出て2、3年の人たちが編集に当り、私自身は山岳雑誌の最高峰？と銘打つ「岩と雪」（季刊）の編集に当つている。これは山の雑誌社として20周年の記念に「ハイカー」を出したが来るべき30周年には世界に持出せる雑誌を出すべきだと主張し、読者から誌名を募集した結果誌名がきまり、そうすると30周年まで待つ気持はなくなり、その時はその時で又新しい考えが生れるとして、前夜祭として、1958年7月第1号を出し、1960年1月第7号を出す運びとなつた。私は本文の前提において、本紙の求める「日本登山界」についての概略をのべたが、現在は山の装備、登山術も面目を一新し、私設山岳学校も2、3現われ、外国の模倣ではあるが、人工登山技術も採用されて、難場の初登山競争も華々しいが、その反面滑落、吹雪、雪崩による遭難、疲労、凍死などの事故も激増の一途をたどつている。警察庁の「山の遭難白書」によると1959年1月から12月20日までの遭難事故は187件、死者187人、負傷109人、行方不明5人でまさに社会問題化すべき数字で

ある。（その後東大の滝谷遭難と専大の北鎌尾根遭難、明大の立山雷鳥沢の雪崩遭難が発生した）

戦後早々高校生の遭難が続発したとき、世間では彼等に指導者がいないからといった。しかし今は高校生を含むあらゆる山のグループに指導者がいるはずであるのに事故がふえて行くのは、簡単に登山人口がふえたからだとばかりいえない。一方山岳雑誌は登山する人々にどのようにならなければならないのであろうか。その大部分が山岳雑誌の名は知っているし、又毎月手にとり、あるいは唯一の指針として、熱心に精読している人たちは私は知っている。そうすると私たちの山岳雑誌は、ただうらんかなのため、おかし面白く編集して部数がふえて行けばそれで良いという考えは全くまちがいで、広く学会を含める岳界から良識を求め、それをたくみに整理し、編集して、多数の若人に供給することが任務となるのであり、いわゆる山の公器としてあつかわなければならないと考える。さらに私自身の考えをいえば、若い人々をヒロイックに導くような編集は不可であり、将来社会の中心人物として、活躍すべき人間形成に役立ち、智と情を兼ね、体力と気力にあふれ、心やさしく、他人に愛される人をきずく雑誌をきずいてゆきたいと念願している。そのためには、遭難を絶対に起きないこと、安全なる行動を基礎として、明朗にして充実した登山ができるように導きたい。そのために山の遭難事故報告、防止策の記事には充分ウエイトを置く。隠しごと一切無用でわるい結果となる、そして良き登山者とは、よき子、よき兄弟、よき親、よき社会人であるという理念をうえつけて行きたい。（山と渓谷社編集長）

南ア山腹の植物踏査から

中村武久

5年前、1954年9月、南アルプス山伏峠方面に採集を試みたのが私の南アルプスの初めての経験である、今まで高山といえば北アルプスしか知らぬ私には、高山は岩はだも荒々しく時に尾根すじに発達する御花畑なる草原、そんなものが頭の中にこびりついていたのだが、標高3000m近い三伏峠附近の山々がどう見ても高山としての感じに乏しく、アオモリトドマツ、シラビソやコメツガなどの喬木繁る尾根すじ、少なくとも北アルプスではこんな景色は可成り低いところでないと思えない。かりにこれらの植物は高所にあつてもせいぜいハイマツ式に地面をはい余り背が高くならないのが常である。かと云つて南アルプス全山が山頂部まで斯かる喬木が繁つているというのではなく概して北アルプスとはこんな点に於て景観を異にしているといえよう。このように樹相に富む南アルプスの山は、その林下にまた多くの林床植物が見られ、私など特にシダ植物に興味を持つ者にとつて心ひかれるのは当然のことだろう。



登山口梨本、ここから西沢渡、大沢渡まで森林軌道があるが台風のため不通となつた

三伏峠方面への採集については、かつて当博物館の研究會々報に報じた通りであるが、あいにくの颱風で予定の塩見岳及び荒川岳方面への踏査が出来ず、高山植物に

については僅か三伏峠近辺の知見しか得られなかつた。アオモリトドマツ、ダケカンパなどの林に囲まれ僅かに開けた草原(三伏公園と呼んだ)には、9月ともなると既に山は秋、花の影は少なく、タカネマツムシソウ、ヤハズヒゴタイ、オヤマリンドウなどが咲くのみで、ヒメゴメグサなどがガレふちに群生するが何れも種子となり、求めていたサンブクリンドウなど草を分けてまで探してみたが、遂にその姿をも目に出来なかつた。とにかく颱風の致すところもあつて山頂での収穫は少なかつたが、ここへの途すじ、鹿塩から塩川沿いに上り南沢を経て尾根すじまでの間には、トガクシデンダやナヨシダをごつすり頂ぎ、又帰途豊口山から釜沢への途で、イナデンダ、ヤマヒメワラビ、オサバグサ、イチヨウシダなどを収穫し、結構得るところ多かつたのである。

こんな経験から、南アルプスへの植物的魅力は益々大きくなり、特に南ア山腹の踏査を何んとか広い範囲に渡つてやつてみたいと考えていた。所がちようど今年、東京都の研究助成を得ることができ、早速その一部として赤石岳、聖岳方面を計画した。特にこの山麓には北又渡を分岐点として深く続く遠山川源流と、北又沢に沿う地帯は最もその興味を引く中心であつた。そして本年8月ようやく5年ぶりに南アルプス行きが実現したのである。

ところがどうも南アルプスでは台風との縁が深く、あいに今回も台風7号の襲来に逢い、予定の赤石岳など山頂部への踏査も空しく変更せざるを得なかつた。台風のために寸断された谷沿いの路、未だ余程注意して歩かねばならぬガケふち、何回かの渡渉、全く山腹の調査だけでも容易ではなかつた。然しとも角も目的の最少限度の、遠山川入り及び北又沢入り、そして聖尾根などの地帯を踏査することができた。

まず梨本を出発、軌道沿いに北又渡までは特にこれと云うものもないが、この辺り矢張り緯度が多少なりとも南に下るだけあつて、ここ南信の山足地帯には北ア山麓地方には見られぬ、ヒメワラビ、タチシノブ、ゲジゲシダ、ヒメノキノシダ、コバノヒノキノシダ、また陰地の岩の上に稀ではあるがアオホラゴケなど比較的暖地性のシダが見受けられる。

これはかつての鹿塩から塩川沿いの場合とも非常に異なる事実で、この辺りの気候比較的温暖なることを物語っている。特に前記の豊口山にはエビランダの報告があるが(下伊那の植物)、あつても極めて稀なものである(過去の行方沼東氏、久保田秀夫氏及び私の採集記録にない)、ところがここ遠山川入りでは北又渡の少し奥まで路傍陰湿な所に到る所に見られる。こんな点、このシダの分布から考へて、太平洋岸的(表日本的)要素が可成り入り込んでいることも納得出来る。イワニキノシダなどもその考へを裏づけるものだろう。とに角斯様にこの辺り山足は比較的暖地性表日本的要素が入り組んでいる。

地理的位置がこんな地帯の高山であるから山腹及び上部の景観が北アと異なるのは決して不思議ではない。ちなみに竹中氏の緯度と高さの気温通減率の関係(日本高山植物概論)によつて、聖岳と北ア白馬岳とを比較してみると、緯度の差が約 $1^{\circ}30'$ であるから、それに順じて



神ノ石付近のみ見られるイナイノデ

両者の垂直的な温度差を考へると高さにして約150m~200mの差があることになる。即ち気温の点からいうと、聖岳頂上3011mは白馬岳に於ける頂上よりもずっと低い村営小屋約2800m辺りと等しいことになる、順じてそれ以下の山腹ではおして知る可しである。確かにアオモリトドマツは、聖尾根では略2400m辺りから出現するが、北アの神ノ田圃附近では1700m辺りで見られる。

南アルプス山腹の植物についてのもう一つの問題は、先きに述べたように地理的位置と垂直的条件からかもし出す結果、特に山腹部における植物が比較的豊富なことと同時に特異なものが分布するという事。今回の踏査で得たカンシダ(新称)も北又渡附近(650m)を分布の中心として、この遠山川沿いに散見するが、このシダは我が国では新しい記録で中国に知られる *Lepisorus oligolepidus* CHING と同じものようだ(倉田悟氏による)、また古くに中井博士によつて知られたイナイノデは北又沢入り神ノ石辺に限つて見られるが、これも近年倉田氏によつて中国、台湾に知られるヤンシャイノデと同じものであるなど分布上面白いものが多数見出される。

そればかりか、北アルプスと比べ、南アルプスでは地質の上からも相当違ふようで、山中所々石灰岩地帯があり、先きの南ア前衛の豊口山など石灰岩の山といつてよからう、特に石灰岩の露出しているところではイチヨウシダやヒメイトラノオなどを見ることが出来、先づ南ア山腹の植物相は北アと比較にならぬ程複雑だといつてよからう。

ただ南アルプスでは北アルプスのように、その山麓が開発されておらず、交通の不便が斯かる調査に非常に困難を生ずること、重い荷物を背負つての採集調査はどうしても充分ならず、余程の準備と余詔があつてのみ完成されるものと思われる。然しまた開発されていないだけにここ南ア山腹にはまだまだ未解のものが数多く眠つているかと思うと、今後の調査が又大いに魅力であることになる。雨あがり 油化粧のイナイノデ

(山博学芸員 東京農大付属高)

舟窪尾根より北葛岳へ

久保田 稔

目的

勤務の関係等で1月中旬の鹿島槍天狗尾根の山行に参加出来ぬ会員が、年末年始の休暇を利用して冬山訓練を行う事が目的で、今回は特に稜線におけるテント生活、雪上技術の習得に重点がおかれた。

計画と準備

日程は12月29日より1月3日までの6日間とし、行動の骨格を次の様に予定した。

場所	C ₁	C ₂
日程	大町 葛岳 (1480m)	(舟窪小屋) 北葛岳 蓮華岳
29日	→	
30日		→
31日		←
1日		←
2日	←	
3日	←	

参加者は女性2名を含む12名で任務分担を次の様に決定した。C、L武田武、S、L器具係久保田、会計係菅沢、食糧係前田、福島、記録係武田睦、気象係海川、荒木、保坂、高橋、北村、古原

準備は、勤め人が多い事と、時期的にも何かと多忙な時期であるため、スピーデーに行う事とし、次の様なプランを樹て実行した。12月3日隊員及び任務分担決定

5、6日偵察、10日準備会、12、13日強化合宿、17日各任務分担者最終計画確立、20日C₁予定地までの荷上げ24日準備完了

行動記録

12月29日 晴 8h05'大町-9h葛温泉-9h35'舟窪岳登山口-11h30'昼食-1h40'C₁着-5h30'夕食-7h55'就床

久保田外7名が入山、武田チーフ外2名は勤務の都合で明日入山、北村は風邪をこじらせて不参加、雪は割合少なく30cm位、5人用ミード、3人用マナスル型テントを使用

12月30日 快晴 3h40'起床-5h朝食-7h15'出発-9h40'岩小屋-10h45'昼食-2h10'C₂(2160m)-5h45'夕食-7h15'就床

昨夜から風邪で熱が高い荒木下山、他の7名全員でC₂建設に向う。急傾斜で雪が深くラッセルがはかどらぬため2160mの森林限界にC₂を建設した。菅沢、前田がC₁に帰り他はC₂へ入る。C₁へは武田、高橋、保坂が大町より着く。

12月31日 曇後雪 3h30'起床-4h30'朝食-5h30'出発7h20'稜線-9h01'七倉岳-10h20'昼食-12h35'C₂着-3h30'年取り-9h就床

久保田、武田睦、海川の3人でアタックの為出発するが、風はなま暖かく、東の空もどす赤い朝焼けで明らかに天候悪化の気差しである。7時半には1時間半遅く出た古原、福島に追いつかれる。稜線からみえる槍、穂高連峯は一種の厳しさをもつて聳えている。つい10日程前



C₂ キャンプ

に6人の若きアルピニストをのんだ北鎌、無情なり。古原、福島とは七倉岳で別れ、アイゼンにはきかえ、アンザイレンして北葛岳へ向うも、天候の悪化は思ったよりも早く、3程の地点より引返す。C₂へはC₁より全員上つてきたが明日からの予定を再検討し、再びC₁へ下る。3時から雪のお供え、ザイルのしめ縄、わざわざ下から持参したお飾りを飾つて年取りをする。よきものである。

元日 雪 停滞、C₁とC₂の人員一部入替え、気温が上つて行動出来ず。昨夜はC₁では雨だったそうだ。C₂へC₁よりマナスル型テントを前進させC₂7名、C₁3名とし、古原、海川、福島がC₁へ下る。夕方から気温が急激に下り始めた。

1月2日 晴後曇 3h30'起床-4h朝食-4h50'出発7h七倉岳-8h最低コル-10h32'北葛岳-11h15'コル昼食-1h七倉岳-2hC₂着-2h45'C₂発-3h40'C₁着

最低気温10度C、テントがかちかちに凍っている。絶好のアタックチャンスであった。稜線から眺める山々は朝日に光り輝いていた。いかにも新年らしかった。しかし風は相変わらず強く、カメラのシャッターがおりなくて傑作をものにしえなかつたのは残念であった。七倉岳から北葛岳までは技術的に難しい所はなかつた。たゞアイゼンがブスブスともぐつていつてしまうのがいやだった。天候が悪くなりだした為わずかに13分頂上にいたゞけで下つた。テントに帰つて皆から握手げめになつた時始めて頂上に立つたのだという実感が沸いてきた。久保田、保坂はC₁へ下る。

1月3日 快晴 撤収 PM6h大町着

皮肉にも始めて快晴であった。しかし昨夜は降雪が多く、撤収は意外に時間が喰つた。

結 び

我々は行動、器具整備、食糧等大した失敗もなく終つたがC₂建設地点の判断が甘かつた様だ。舟窪尾根の完全な極地法の記録はまだないという。我々はもう一度、C₃を出すことによつて蓮華、針木、不動、烏帽子へ足をのばし完全な記録としたい。(大町山の会会員)

冬の小鳥たち

長 沢 修 介

北アルプスも山頂から中腹へ、中腹から山麓、そして里へと次第に雪が降り積つて来る。それと共に小鳥たちは一步一步飢餓と寒さの世界へと追われて行く。あるものは南の暖かな地方へと去り、あるものは高い山から里近くまで下り又あるものは人間のおおぼれをいだいで生命をつなぎとめている。今月はこのように寒さと欠乏の世界に生きる小鳥たちの生活を紹介してみよう。まず冬期を安曇野で過す鳥の中には大きくわけて三種類の鳥がいることから説明しよう。それは冬鳥、漂鳥、留鳥の三つの種類である。それらの鳥の身近に見られるものを紹介しよう。

○冬鳥

紅葉の山の頂が白くなり始める頃、かつての夏にあれほど沢山の小鳥たちでにぎわつた所も、今はもうそのほとんどが南に去つてしまひつそりとして淋しい。そんなところに或る晩こつそり大群で到着する。彼等の多くはエニセイ河以東のシベリヤ、沿海州、アムールランド、ウスリランド、満州、蒙古、カムチャッカ、樺太の北部、千島及びアラスカ西部等で夏季繁殖し秋になつて成長したヒナ共々群を作つて渡つて来たのである。このようなものを冬鳥という。彼等の渡つてくる経路は北海道を通過して本州に来るものと、直接日本海を越えて本州中部地方に来るものと二つの道がある。冬鳥の中には大型のカモ類や白鳥、ツル類等日本に来るものは120種を数えるが、ここでは我々の身近な鳥を見ることにする

カシラダカ

スズメ科の鳥で、頭部の羽毛を逆立てるのでこの名がある。東部シベリヤ、カムチャッカ半島の地域で繁殖し冬期日本及び南方に渡る。日本には10月中旬から、翌春5月上旬まで止る。山麓、農耕地の雑木林に多く「チツチツ」と鋭く短かい地鳴をして、地上で餌をあさることが多い。食物は野草が96%、樹木の種子が約1%、穀物が2%となつている。

レンジャク

レンジャクの類にはヒレンジャク、キレンジャクがある。常に群を作つて生活しどちらも総体的にブドー色をしていて翼と尾羽は黒色、頭頂の羽毛が房状に長くなり羽冠をなしている。尾羽、翼の先端に鮮紅色をもつたのがヒレンジャク、鮮黄色をもつたのがキレンジャクである。両種共にシベリヤの東南部一帯で繁殖し、冬期日本及び南方に渡る、キレンジャクの方が多く、ヒレンジャクの方が数が少ないようだ。樹木の果漿を好んで食べ特に寄生木の実を好む特徴がある。

シメ

北海道以南では冬鳥で、北海道では夏鳥として繁殖している。ずんぐりとした鳥で嘴は特に太く円錐型で翼に白斑があり野外では、これが良く目立つ。渡りの時期には多数で群をなすが、あとは単独か1~2羽でいることが多い。冬枯の雑木林では「ツイー、ツイー」または

「キヨ、キヨ」と鋭い金属性の声で地鳴するのを良く見かける。樺やその他の木の実を食べる。

ジョウビタキ

単独か1~2羽でいることが多く「ヒッ、ヒッ」と鳴きながら枝わたりしている。雌は頭上から背面が銀白色をしており黒色の翼に白斑が良く目立つ。尾を上下に振りながら「カッ、カッ」と小声で鳴いて昆虫類が主食であるが冬季は木の実なども啄む。

ベニマシコ

小型で尾が長く、雌は羽色がバラ色で美しい鳥である。嘴が太く短かくて、いつも叢に2~3羽で生活している「フィー、フィー」と鳴きながら雑草の種子を食べている。北海道以北の地方で繁殖し、本州以南には冬鳥として渡来するが、近年東北地方で一部繁殖しているところが見付かった。

マヒワ

いつも群がつて生活している小形で可憐な鳥で、飼鳥としても良くしられている。北海道で少数繁殖するが大部分は冬鳥で渡りのときには大群で山地を通る。針葉樹林を好み、樹の実、若芽、蕾などを冬期は食べる。以上のほかに冬鳥にはツグミ、イスカ、アトリなど沢山の鳥が渡つて来て厳寒の中に飢と戦つて生活している。

○漂鳥

夏の繁殖期には山地及び深山や高山に入つてヒナを育て秋から冬にかけて山麓から人里に下つて生活する鳥のことである。

ミンサザイ

夏は溪谷から深山、高山に繁殖し、秋になると人里に下つて来る。冬期は人家付近の庭や、軒下までも現われる。最小形の鳥でいつもせわしげに活動している。鳴声は夏季の複雑美声に反して「チャッ、チャッ」という地鳴だけ。平野の川、藪などの中で小昆虫を見つけて食べている。

ウグイス

万人の知つている鳥であるが、本当の生活や、姿を知る人は余りない。夏の間は産地から、高山まで垂直的分布の広い鳥である。8月末頃から（ホーホケキヨ）の軋りをしなくなり9月になるとほとんど聞かれなくなる、そのかわり「チャッ、チャッ」と舌打ちのような鳴をする、これを笹なぎという。昔から風流な鳥として梅と結びつけて歌や詩にうたわれているが、何もこの鳥は風流を解する訳でも、梅の香が好なのでもない。梅の木は樹皮が凸凹してその凸凹には多くの小昆虫や蛹卵などがかくされている。ウグイスはそれを食べるためにやつて来るのである。

ウソ

飼鳥としても良く馴れるので知られているが、これに本来亜高山帯以上の鳥である。小鳥屋の店先や飼鳥のあの口笛を吹くような「フィー、フィー」と鋭く鳴く声を

聞くと深山の静かな霧の深い針葉樹林を思い出す、そんな所で育つたウツは冬になつて雪が積り、食物がなくなると山麓地方へ下る。嘴の形を見ても解るように木の実、芽、蕾等を食べる。漂鳥としてはこの他にビンズイメジロ等がある。

○ 留 鳥

これは一年中同じ地域に生活する鳥を云うのであるが小さな地域で云つたらスズメやカラス位になつてしまふが少し地域を広げると大体同じ地域に生活しているものがある。それ等を総称して呼ぶ。

シジウカラ

冬鳥の到来で少しの間賑やかだつた森や村も雪が積ると急に静かになる。こんな時に目立つて来るのがシジウカラやエナガの群である。いつも数羽以上群がつて生活しており、枝から枝へととびまわり果は逆さにぶら下つたりしている。雑木林などで出会うと楽しそうに「チン、カララ」と飛びまわっているように見えるが、実は一生懸命餌を探しているのである。主食としてはゾウムシ類、マツケムシ、ジャクトリガ類の卵や幼虫、ハエノ

ガガンボ類のような森林に有害なものばかりである。シジウカラの他にこれと同じような生活を営む種類で良く混つて群を作つて生活している鳥がある。それはエナガ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラなどでこれらを俗にカラ類と呼ぶ。

キツツキ

キツツキの類にはアオゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラの4種類がいる、体の色が全体的に緑色したのがアオゲラ、背黒色と白の斑点があり下腹部が赤いアカゲラ、スズメ位の大きさの灰黒色に白い斑点があり、頭にはチョット赤い色のあるのがコゲラ、このコゲラはカラ類と一緒に林など渡り歩くと「ギー、ギー」と特徴のある唱声を発するのですぐそれと知れる。キツツキの類は森林とは切つても切れない縁があり、足や羽の構造も森林に棲むようにできていて垂直な幹でも自由に上下できる。特に舌の特殊な構造を持ち舌先がモリのようになつていて、やわらかな虫をひつかけて、ひきずり出して食べるようになつている。動物質が83%、植物質が17%位である。以上の他に留鳥としてはスズメ、カラス、キジバト、モズ等がある。(山博調査員 大町郵便局勤務)

私が東山一帯のコケを調べようと思つたのは

ネズミノオゴケ 平林昭一郎

8月9日、採集場所一大町市東山大町公園北側の

は今から5年前の夏だつた。休みを利用してまず大町公園北側の沢から採集することにした。1人でその沢を登りかけた時、土上に黄緑色の見事なコケの一群れが目についた。珍らしいコケだと決めこみ無我夢中で採り、採り終つてから多過ぎることに気がつき、半分を元の処へ植えた位だつた。色々のコケを採集し、中腹と思われる地点で道に出て石の上で一休みしていると、下つてきた笑顔のおじいさんが私の隣りへ腰を下した。私は先ほど採つたコケを見てみると、おじいさんにもここにしながら横目で見て話をした。それによると——このおじいさんの生れは八坂の在(ざい)で、子供の頃親からこの草をチウノツボグサまたはネズミノオツボグサと教えられ、これをたくさん家の周りへ植えておくと、ネズミが自分の仲間と思つて集つてくるから退治するのに都合がよい。しかしどういふわけか花が咲かず種が先につく——と話してくれた。なるほどよく見るとネズミのツツポに似ているが、後の話は納得できない。頂上まで約2時間採集して家に帰つた。翌日博物館の日本隠花植物図鑑を持ちだし、実物と比べていくと967Pのネズミノオゴケに似ている。そこでルーベ、ピンセット、物差しなどを使つて、覗いたり、計つたり苦心しながら調べた結果色々のことがわかつてきた。さつそく「群類観察ノート」の1Pへ次のことを書きこんだ。「採集年月日—1959年

沢入口、標高760m、採集状況—少し湿つたやゝ薄暗い土上、群生、気温20.4°C、群落の状況—長随円形、長径34cm、短径14cm、形態—植物体…光沢ある黄緑色、長さ平均4cm、茎…匍匐状で先端は丸いか尖る。一見してネズミのツツポによく似ている。葉…大体円形、茎に密生、長さ平均1.6cm、頭は丸いか尖る、上方の縁には細かい歯がある。さく胞…薄い褐色、円筒形、表面なめらかで直立または傾斜—これだけ調べるに1日かかりだつた。花が咲かないのは隠花植物のため、種と見られたのはさく胞といつて繁殖に必要な胞子を貯めておくところである。またこのコケを庭先へ植えておくと、ネズミが集つてくるというが、作り話のような気がする。しかし八坂、広津などの在へ行くと庭先にたくさん生えている。植えたのか、自然に生えたのかわからない。とにかく今後こういった問題も調べてみたい。このコケは後日、東京共立薬科大学の桜井先生に鑑定していただいたらネズミノオゴケだつた。人家の庭先からかなり高い山の頂上までの土上、岩石上などに生育しており、日本ではどこでも見られる。

私は始めてコケの調査を計画し、その最初に採集したこのネズミノオゴケを標本No.0として記念し、末永く保存したいと思つている。今年のネズミ年にちなんで、ネズミノオゴケの思い出を書いてみた。

(山博学芸員)

山 岳 図 書 室

この度当博物館では山岳図書室を計画いたしました。一般観覧者、登山者、スキーヤーなどに広く利用していただけたらと思つております。現在手持の図書はわずかではありますが皆様方の強力なご援助によりまして除々

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

に充実したものにして行きたいと思つています。山岳団体の機関紙、山岳書等ご惠贈賜りますようお願いいたします。ご惠贈賜りました方々に「山と博物館」を寄贈させていただきますと思つております。

山と博物館 第5巻第1号 1960年1月25日発行
発行所 長野県大町市 TEL(大町) 211
大町山岳博物館
印刷所 長野市岡田町 176
第一法規出版株式会社